

道倫（遁倫）集撰『瑜伽論記』について

——基撰『瑜伽師地論略纂』との関係から——

水谷（林）香奈

一 はじめに

『瑜伽師地論』（以下『瑜伽論』）は唯識思想を研究する上で最も重要な文献の一つであり、中国では玄奘（六〇二—六六四年）がインド留学から帰国して間もない貞観二十二年（六四八）年に翻訳すると、唯識諸家によって注釈書が執筆された。しかし、その多くは散逸し、現存するものはわずかである。本稿で扱う基（六三一—六八二年）撰『瑜伽師地論略纂』（以下『略纂』）十六巻と道倫（遁倫・生没年未詳）集撰『瑜伽論記』二十四巻は、その代表とも言うべきものである。

⁽¹⁾この両疏を比較した先行研究としては勝又俊教の論攷が詳しく、『略纂』の一部が『瑜伽論記』にしばしば引用され、道倫が基の思想に影響を受けていることが明らかにされている。また、『略纂』が『瑜伽論』の途中までの注釈しか現存しないのに対し、『瑜伽論記』は『瑜伽論』全巻への注釈であり、景師（惠景）、備師（文備）など、すでに散逸した諸師の『瑜伽

論』注釈書を数多く引用しており、当時の唯識諸家の思想を知る上での貴重な資料として、いくつかの研究がなされている。⁽²⁾

しかし、『瑜伽論記』の研究は少なく、道倫の思想の解明もいまだ十分であるとは言えない。そこで本稿では『略纂』と『瑜伽論記』について、『瑜伽論』巻第一に対応する箇所限定して詳細に比較を行い、そこから読み解ける基と道倫の相違点に注目することで、その思想的背景を考察することとする。

二 『略纂』と『瑜伽論記』の概要

まず、両疏とその著者について概観しておく。基は玄奘の高弟の一人であり、多くの著作を残している。『略纂』はそのひとつであり、基の没後まもなく、八世紀初めに製作された⁽³⁾と考えられる「大唐慈恩寺法師基公碑」には、基の業績を述べた箇所です。「所造二諦唯識等章、法華瑜伽等疏、総二百余部」（新纂続蔵八八、三八二上）と、基の代表的な著作の一つとして『略纂』の名が挙げられている。基撰とされる章疏には偽撰が

疑われるものも含まれているが、『略纂』は真撰と見て良いであろう。

『略纂』の執筆動機について、基はその冒頭で「妨難及不尽之処。今粗而叙出」（大正四三、一上）と述べている。すなわち、基以前から存在していた惠景や文備などの疏では、『瑜伽論』に関する様々な異論に応えきれないことが、この疏を執筆した理由の一つである。後述するように、これが基の晩年の著作であるとすれば、『瑜伽論』の訳出から三十年以上が経過し、惠景などが疏を執筆した時とは異なる疑問が玄奘門下の内外から起きていたことも考えられる。

また、『略纂』でも惠景の説は十三回にわたり引用されるが、真如所縁縁種子や無表色のように、基の教学において重要なポイントとなる教理上の問題について、惠景からの影響が見られるとの先行研究がある。⁽⁴⁾ 基は先達の論疏に目を通し、自身の教理から見て不十分な点があると判断して、筆を執ったことになる。

次に成立時期について、保坂玉泉は『略纂』が『瑜伽論』巻第六十六、撰決撰分中思所成慧地之二で終わっていることから、「大師の晩作むしろ示疾直前の作」⁽⁵⁾であり、基が完成を待たずに示寂したと判断している。『東域伝灯目録』（一〇九四年成立）（大正五五、一一五六下）などの目録類でも一貫して『略纂』は十六巻と記載されている。『瑜伽論記』では、『略纂』

道倫（道倫）集撰『瑜伽論記』について（水谷（林））

では現存しない『瑜伽論』第六十六巻以降の部分に相当する第十八〜二十四巻にも何度か基の説は引用されているが、『瑜伽論記』全体でおよそ九百七十箇所ある基への言及の中で、この七巻分に含まれるのはわずか十七箇所である。圧倒的に多くの言及が『略纂』現存部分と対応する巻に集中していることから考えても、『瑜伽論記』執筆時に道倫が参照したのは現在と同じ十六巻の『略纂』だったと見るのが妥当であろう。

なお、これら十七箇所については、『略纂』には現存しない巻に対応することになるが、それは必ずしも『略纂』の後半部分の散逸を示すものとは限らない。例えば、『瑜伽論』第七十八巻に対する記述で、道倫は「基云。害伴随眠者、第六識俱生身見等撰。：微細随眠者、謂於第八地已上。如彼唯識章釈」（大正四二、七八六下）と述べている。同様の方法での引用はほかにも数箇所確認できており、十七箇所の中には、『略纂』の現存部分や『大乘法苑義林章』（以下『義林章』）など基のほかの章疏からの引用も含まれている。おそらくはこのようにして、『略纂』には対応箇所がない解釈も『瑜伽論記』に記されていると考えられる。

一方、道倫は『瑜伽論記』以外に著作や伝記などは伝わらないが、基よりも数十年後に活動した新羅僧であるとされ、⁽⁸⁾ 道倫と表記されることもある。⁽⁹⁾ 勝又によれば、『瑜伽論記』は基の説を中心として、諸師の『瑜伽論』注釈書を集成した

道倫（遁倫）集撰『瑜伽論記』について（水谷（林））

ものであり、惠景の説への言及は千二百七十回前後と最も多い。基の説の引用回数はおよそ九百七十回前後だが、明言せず引用されることも多く、実質的には『瑜伽論記』の約半分が『略纂』の文から成っているとも言われる。⁽¹⁰⁾『瑜伽論記』は全体を「一叙所為、二彰所因、三明宗要、四顯藏攝、五解題目、六釈本文」（大正四二、三二一上）という六門に分別しているが、この科段の構成と名称は『略纂』の「六門料簡」（大正四三、一上）と完全に一致していることから、両者の関係の深さがうかがえる。⁽¹¹⁾

三 『瑜伽論記』と『略纂』の相違点

『略纂』と『瑜伽論記』の密接な関わりについては、すでに先学の指摘するところであるため、本論で両疏の相違点から、道倫の見解や思想的背景を考察してみたい。道倫は『略纂』の文章をあまり改変することなく引用することが多いが、細部まで比較すると、その引用姿勢は必ずしも単純かつ直接的なものばかりではない。

第一に、道倫は『略纂』の文章の順番を時折変更している。例えば、『瑜伽論』冒頭（大正三〇、二七九上）にある「唵陀南」すなわち十七地の名を列挙したウダーナ（偈頌）に対する注釈箇所、道倫は『略纂』の章立てを組み替えている。基はこの「唵陀南」について、「一名。二体。三境界果。…四釈妨難」

（大正四三、二下）の四門に分ける。そして、「一名」において、十七地の中の第六地と第七地の名称が唵陀喃では「三摩地俱非」（大正三〇、二七九上）、その後の長行では「六者三摩呬多地。七者非三摩呬多地」（同上）となっており、異なることに對する疑問を挙げ、「如下釈妨中解」（大正四三、二下）として、その回答を「四釈妨難」に譲っている。「四釈妨難」を見ると、十七地の各名称に関する疑問が八問挙げられ、基は第三問で三摩地（サマーデー）は等持、三摩呬多（サマーヒタ）は等引であり、等引は色界と無色界の五蘊を体とするが、等持は三界の五蘊が体となるといった違いがあると回答している。

それに対して道倫は、問答自体は『略纂』からそのまま引用するが、『略纂』の「如下釈妨中解」の箇所に、釈妨難の第三問を挿入し（大正四二、三一三下—三一四上）、「四釈妨難」に相当する箇所まで読み進めずとも、読者がその場で「三摩地」と「三摩呬多」の違いを理解できるように配慮している。⁽¹²⁾

第二に、『瑜伽論記』には『略纂』ではあまり言及されない撰論学派の説に対する関心が見られる。例えば、十七地の第二である意地への注釈として、意地の「意」つまり第六意識から第八阿頼耶識までの三識を説明する中、『瑜伽論記』では『略纂』にはない九識説との相違や会通についての解説が見られる。

『瑜伽論記』

此中景擬真諦師、引決定藏論九識品、立九識義。然彼決定藏即此論第二分、曾無九識品。備師又云。昔伝引無相論阿摩羅識証有九識。彼無相論即是顯揚論無性品。然彼品文無阿摩羅名。今依楞伽經等有九識義。第九名阿摩羅。此云無垢。基師云。依無相論・同性經中、彼取真如為第九識。真一俗八二合說故。今取淨位第八識本以為第九。染淨本識各別說故。如來功德莊嚴經云。如來無垢識。是淨無漏界。解脫一切障。円鏡智相。此中既言無垢識与円鏡智俱。第九復名阿末羅識。故知第八識染淨別說以為九也。(大正四二、三一八上)

『義林章』

依無相論・同性經中、若取真如為第九者、真俗合說故。今取淨位第八本識以為第九。染淨本識各別說故。如來功德莊嚴經云。如來無垢識。是淨無漏界。解脫一切障。円鏡智相。此中既言無垢識与円鏡智俱。第九復名阿末羅識。故知第八識染淨別說以為九也。(大正四五、二六一中)

『瑜伽論記』によれば、惠景はかつて真諦の説にならない九識義を立て、それに対して文備は新訳には九識説はないと指摘したという。次に道倫は『義林章』を引用し、第八識と第九識は染淨別であることを明らかにする。本来『略纂』では、この『瑜伽論』の箇所については、心・意・識と第八・七・六識との対応しか説明されていない(大正四三、六中)。わざわざ『義林章』を引用したのは、九識説の変遷が道倫にとって重要であったためだろう。道倫は真諦訳の『撰大乘論』『撰大

道倫(道倫)集撰『瑜伽論記』について(水谷(林))

乗論釈』を単に「論」(大正四二、三一五下)や「撰論」(同、三二二上)と呼び、玄奘訳『撰大乘論』を「新訳撰論」(同、三一五下)と呼ぶこともある。一方、基が単に「撰論」と言うときには常に玄奘訳のみを指し、真諦訳は「梁」や「旧」を冠して呼ぶ。先行研究では、道倫が基の弟子筋にあたるという指摘がなされてきたが、⁽¹³⁾九識説への関心と合わせると、道倫はかねてより撰論学派の思想や真諦訳に親しんでいたのではないかと考えられる。

第三に、『俱舍論記』には『大毘婆沙論』の影響がしばしば見られる。例えば夢の体について、基が『成唯識論』に基づき、四説あるとしているのに対して、道倫は『大毘婆沙論』に基づいて六説あるとしており、『成唯識論』には言及しない。

『略纂』

夢有十縁。如由揺扇。如世戲樂。以扇揺之。即便睡夢。唯識第七有四説。一云。痴為体。二云。痴無痴為体。三云。思想為体。四云。別有体。或為七縁。第七縁中有四。如文可知。(大正四三、八中)

『瑜伽論記』

夢有七縁。：問。夢以何為体耶。答。婆沙六説。評家取心心所為体為正。今大乘中亦以眠相応心心所法為体。……(大正四二、三二〇上)

『略纂』では『大毘婆沙論』について八回程度しか言及されないが、『瑜伽論記』では七十回以上であり、道倫は『大毘婆沙論』にも造詣が深かったことが知られる。

四 おわりに

本稿では、『略纂』が成立当初から未完であり、現在と同様の巻数であった可能性が高いことを確認し、道倫については、『略纂』を『瑜伽論記』に引用する際には構成に一部変更を加えるという独自性を示す場合もあることや、唯識のみならず『大毘婆沙論』にも通じている人物であることを明らかにした。

基が惠景など自分以前の唯識諸師から影響を受けつつも、それらの注釈書にあまり言及しないのに対して、道倫は諸師の解釈を取捨することなく併記し、今回の調査範囲に限定すれば、特定の見解に明確な賛同・批判を行うことはあまり見られない。中国における複数の『瑜伽論』注釈書を集成したものが『瑜伽論記』だが、道倫が基の唯識思想を学びながら、真諦訳や撰論学派の教義にも関心を持っていたならば、それが執筆の一因となったとも考えられるだろう。今回は両疏の比較箇所が限定されていたため、今後は比較範囲を広げること、さらに考察を深めたい。

1 勝又俊教「瑜伽論記に関する二三の問題」(『仏教研究』第二巻第四号、仏教研究会、一九三八年)。なお、新羅の唯識仏教に関する諸研究については、橋川智昭「新羅唯識の研究状況について」(『韓国仏教学Seminar』第八号、二〇〇〇年)にまとめられ

ており、大いに参考になった。

2 江田俊雄「新羅の遁倫と倫記所引の唐代諸家」(『宗教研究』第一一巻第三号、一九三四年)。吉田道興「西明寺円測における止観」(『宗教研究』第五一巻第三号、一九七七年)。楊白衣「新羅の学僧道(遁)倫の『瑜伽師地論記』の研究」(『東洋学術研究』第二三巻第一号、一九八四年)などがある。

3 拙論「基に関する伝記的記述の変遷について」(『東アジア仏教研究』第一〇号、二〇一二年)。

4 常盤大定『仏性の研究』(丙午出版社、一九三〇年)。および結城令聞「相宗無表色史論」(『常盤大定博士還暦記念仏教論叢』弘文堂書房、一九三三年)。

5 保坂玉泉「慈恩撰疏年代考」(『性相』第九号、一九四〇年、『性相・法隆寺学研究』(春秋社、一九九六年)に再録)。

6 大正蔵では「伴」となっているが、これは三種類ある随眠の中の「一害伴随眠」の解説であるため、「眠」に訂正した。

7 たとえば『瑜伽論記』巻第二十二では、「基師云。断五支者、断五上分并五下分。成就六支者、成就六念。又成就則所行等六支。如前第三十四卷記釈」(大正四二、八〇七上)として、『瑜伽論』第三十四卷の基の注釈と同一内容であることが明記されている。

8 江田前掲論文。および富貴原章信『日本唯識思想史』(大雅堂、一九四四年)。

9 遁倫を誤記とする見解については、結城令聞『唯識学典籍志』(大蔵出版、一九六二年、二六四―二六五頁)を参照。

10 勝又前掲論文。

11 各門の記述も『略纂』と『瑜伽論記』では類似する部分が多い

が、「二彰所因」は大幅に異なっており、道倫が必ずしも『略纂』に偏重していないことをうかがわせる。

12 この編集に合わせて、道倫は『略纂』の「四釈妨難」に相当する箇所についても、関連する問答をまとめ、問答の順番を一部変更している（大正四二、三一四下―三一五上）。

13 勝又前掲論文。

〈二次文献〉

弥勒説・玄奘訳『瑜伽師地論』大正三〇巻所収

道倫（遁倫）集撰『瑜伽論記』大正四二巻所収

基撰『瑜伽師地論略纂』大正四三巻所収

永超集『東域伝灯目錄』大正五五巻所収

佐伯定胤、中野達慧共編『玄奘三蔵師資伝叢書』新纂続蔵八八巻

所収

〈参考文献〉

江田俊雄「新羅の遁倫と倫記所引の唐代諸家」〔『宗教研究』第一一

巻第三号、一九三四年、八七―一〇〇頁〕

勝又俊教「瑜伽論記に関する二三の問題」〔『仏教研究』第二巻第四号、仏教研究会、一九三八年、一二二―一四一頁〕

橘川智昭「新羅唯識の研究状況について」〔『韓国仏教学 Seminar』

第八号、二〇〇〇年、六六―一二六頁〕

常盤大定『仏性の研究』（丙午出版社、一九三〇年）

林香奈「基に関する伝記的記述の変遷について」〔『東アジア仏教研究』第一〇号、二〇一二年、七一―八六頁〕

富貴原章信『日本唯識思想史』（大雅堂、一九四四年、一五五―

道倫（遁倫）集撰『瑜伽論記』について（水谷（林））

一五六頁）

保坂玉泉「慈恩撰疏年代考」〔『性相』第九号、一九四〇年、『性相・法隆寺学研究』〈春秋社、一九九六年、三六一―三八六頁〉に再録〕

結城令聞「相宗無表色史論」〔『常盤大定博士還暦記念仏教論叢』弘文堂書房、一九三三年、五六三―六二五頁〕

結城令聞『唯識学典籍志』（大蔵出版、一九六二年、二六四―二六五頁）

楊白衣「新羅の学僧道（遁）倫の『瑜伽師地論記』の研究」〔『東洋学術研究』第二三巻第一号、一九八四年、二九二―三〇五頁〕

吉田道興「西明寺円測における止観」〔『宗教研究』第五一卷第三号、一九七七年、一四七―一六〇頁〕

〈キーワード〉道倫（遁倫）、『瑜伽論記』、基（窺基）、『瑜伽師地

論略纂』、撰論学派

（東洋大学助教・博士（文学））